

センターだより

ぎふの
まじな

財団法人 岐阜県教育文化財団
文化財保護センター

ぎふの 埋蔵文化財

50

2007.11.1

岐阜県の埋蔵文化財
情報が満載



出前授業(明宝チャレンジクラブ児童)



職場体験(垂井町立不破中学校生徒)



タイムスリップ探検隊(参加児童)



遺跡見学(天瑞市なかぞね保育園児)

特集

「荒尾南遺跡から出土した銅鏡と銅鐸片」

教育普及活動報告

出前授業、職場体験、タイムスリップ探検隊、遺跡見学、キッズ考古学

考古学教室①

あゆみ

センター掲示板

水を治めるための工夫

現地説明会の報告ほか

発掘速報展案内ほか

センターの行う教育普及活動の紹介



夏休みキッズ考古学

「縄文時代へタイムスリップ～わくわく土器・土器大研究～」と題したこの企画も第3回となりました。今年度は7月24日(火)・25日(水)と8月22日(水)の3日間の日程で行いました。1日目は土器の種類、飾り、文様などの研究や拓本、施文などの体験をし、オリジナル縄文土器の設計図を描きました。2日目は、設計図をもとに土器を作りました。その後、約1か月の乾燥期間を経て、3日目に土器の野焼きを行いました。参加者の皆さんが一生懸命土器を作る様子、暑い中で火に近づいて土器を焼く様子には、とても感心させられました。

参加者の一言感想

- ・設計図どおりにはいかなかったけど楽しかった。 ・オリジナルの土器が作れて楽しかった。
- ・四角い粘土から立派な土器になってうれしかった。 ・実際に縄文人になった気分が土器が作れたのでうれしかった。
- ・熱い火に近づいて土器を置いたことが大変だった。
- ・設計図を見ながらきれいに仕上げようと慎重にやって、完成したときうれしかった。
- ・実際に火で土器を焼くところを見たことがなかったのでうれしかった。



拓本づくり



土器づくり



野焼き

職場体験・発掘体験・遺跡見学など

夏休み期間を利用して、今年も多くの園児・児童・生徒・一般の方が、当センター三田河事務所や飛騨出張所、各遺跡発掘調査現場を訪れ、職場体験や遺跡見学、発掘体験などを行いました。

大垣市にあるなかぞね保育園の園児の皆さんは、整理作業の見学をした後、出土した遺物を洗って乾燥させる容器を、工作の時間に新聞紙や新聞折り込みチラシなどで作り、届けていただきました。



職場体験をした中学生の感想

「夏休みに職場体験で発掘作業や整理作業、測量作業などもやらせていただきました。実際にやってみて、暑い中での発掘作業は大変でしたが、土器を見つけた時はうれしかったです。また、整理作業では、土器を洗ってきれいな文様が出てきたときには昔の人々が土器を作った時のことも想像できました。今回体験させていただいた仕事は昔のことを調べるためにとても大切な仕事だと感じ、多くの人々が関わっているのだと感じました。この貴重な体験を活かしていきたいです。」



整理作業見学
(大垣市なかぞね保育園)



土器の接合作業
(岐阜市立伊奈津中学校生徒職場体験)



土器の洗い作業
(不破高校生徒職場体験)

出前授業

毎年、文化財保護センターには、「小中学生に対して、埋蔵文化財を活用した歴史の授業をしてほしい」という要望があります。

今年の夏休みも、明宝チャレンジクラブ(郡上市明宝の小学校児童)から「夏休みの子ども講座の一つとして、歴史の学習を行うので指導してほしい」という要望があり、8月10日(金)、明宝コミュニティセンターで小学生児童12名を対象に本物の土器を利用した出前講座を行いました。その講座に先立ち、明宝チャレンジクラブの子どもたち(小学生22名)は、7月31日(火)に大垣市荒尾町にある「荒尾南遺跡」を見学し、発掘体験も行いました。

出前講座では、この発掘体験を生かして、次のような学習を行いました。

初めに、一人一人が縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器など時代の違う土器を実際に見たり、触れたりして観察した後、意見交流を行いました。交流の中で子どもたちは「土器の形が変わってきている」「文様が細かくなっている」「土器の厚さが違っている」など、土器の特徴を見つけ出し、それぞれの時代の人々が土器を工夫して作っていたことに関心を持ちました。

次の学習では、縄文・弥生土器の「拓本」をとりました。いろいろな文様のある土器を探す中で文様の特徴を見つけることができました。

また、土器の文様を正確に記録する方法の一つとして拓本があることも知りました。拓本にした後、写し取った文様をラミネートして「しおり」を作り、「きれいな文様のしおりだね」とうれしそうに友だちに話している女の子もいました。



土器の文様を見る児童

タイムスリップ探検隊

今年も飛騨(ウバガ平遺跡:高山市上切町 7月26日)・美濃(荒尾南遺跡:大垣市荒尾町 8月1日)の2会場で「タイムスリップ探検隊」と題した親子発掘体験活動を行いました。午前には発掘体験を、午後には見つけた土器片を洗ったり、拓本をとったりする作業や遺跡見学など、大昔の世界にタイムスリップした一日でした。

参加者の感想

大垣市 6年生 Aさん
発掘作業で、土器のかけらがみつかったときが一番楽しくうれしい瞬間でした。私たちの住んでいるこんな近くで大昔(弥生時代)の人たちが使っていた土器などが発見されることが夢みたいです。「土器」「弥生」と聞くたびにこの体験のことを思い出します。

高山市 5年生 Bさん
私は歴史が大好きです。だから、タイムスリップ探検隊に参加しました。発掘は土器を探すのが楽しかったです。4つ見つけました。土器洗いはきれいにブラシで汚れを落とすことができました。拓本は最初は失敗ばかりだったけど慣れると面白くなってよかったです。縄文・弥生・古墳の住居も見学しました。どの住居もいろいろな特徴がありました。タイムスリップ探検隊に参加して多くのことを学ぶことができ、貴重な体験をすることができました。



土器の洗い作業(美濃)



遺跡見学(飛騨)



荒尾南遺跡から出土した銅鏡と銅鐸片

(平成18年度発掘調査で出土した銅製品)



荒尾南遺跡の概要

荒尾南遺跡は、東西約250m、南北約650mに及ぶ、県内最大規模の遺跡です。

これまでの発掘調査で、弥生時代から古墳時代にかけての方形周溝墓や坑列などの遺構が見つかり、弥生土器・土師器・木製品など約5万点が出土しています。出土遺物の中でも、82本の櫓を持つ大型船を描いた線刻絵画土器は、東海地方に類例のないもので全国的にも注目を集めました。

また、平成18年度の発掘調査では、60万点もの土器が出土し、弥生時代中期の方形周溝墓や弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡や水田跡、弥生時代中期から古墳時代初頭に機能していたと考えられる大溝などの遺構を発見しました。



銅鏡が出土した大溝の様子(南から撮影)

東海地方最古級の銅鏡「倭鏡」が出土

平成18年度の発掘調査により、直径8.5cmの銅鏡「倭鏡」(日本製の鏡)が完全な形で出土しました。これは、「重文鏡」(同心円を複数重ねて文様を描いた鏡)と呼ばれます。そして、出土した銅鏡には円形の小さな点(珠文)と半円形(弧文)をいくつも連ねた文様があります。こうした文様構成は特殊なもので、現在のところ全国に類例はありません。

また、銅鏡に刻まれている細い線の文様は、所々が摩耗しており、当時の人々が何度も繰り返し使用していたことがうかがえます。銅鏡の時期は、同時に出土した土器の年代から、弥生時代終わり頃に廃棄されたことがわかりました。使われた期間を考えると、製作された年代はさらに古く、弥生時代後期にさかのぼる可能性があります。



出土した銅鏡(背面)
直径8.5cm 原寸大



銅鏡の出土状況(鏡面)

出土した銅鏡(背面)の模式図 2分の1

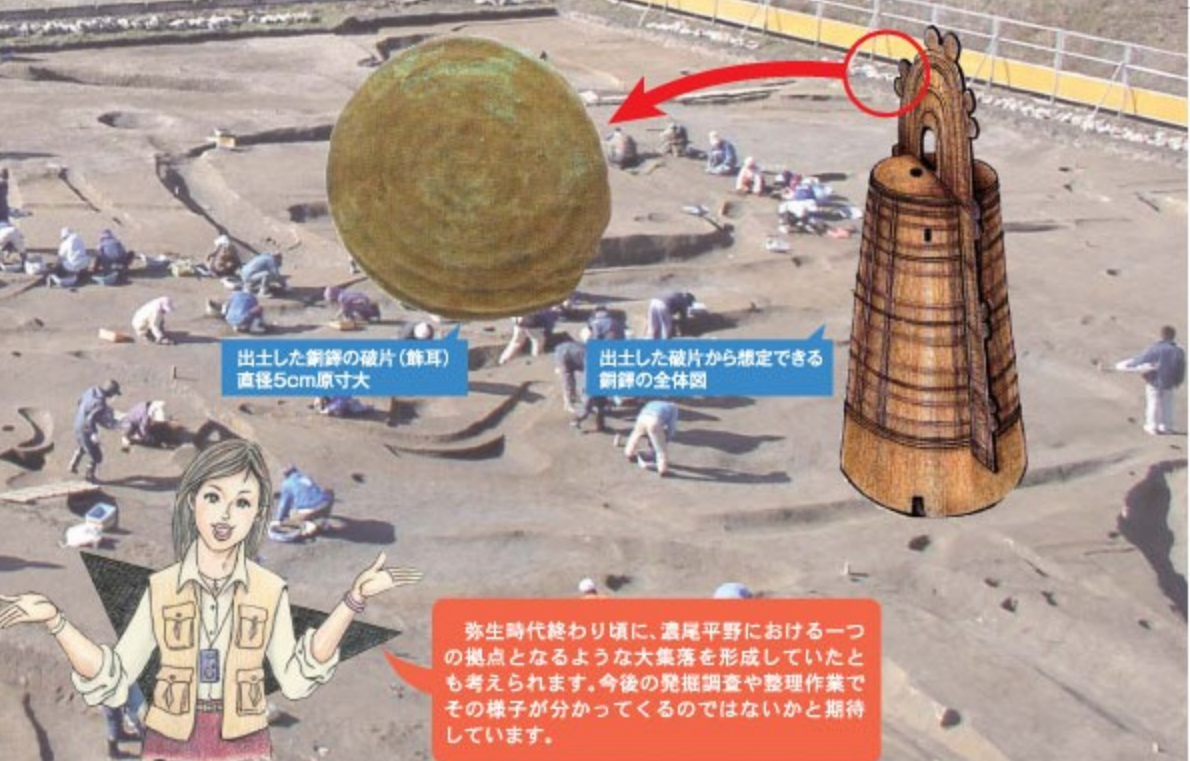


銅鐸の破片が出土

平成18年度の発掘調査では、弥生時代の代表的な金属器である銅鐸の破片も出土しました。この破片は、近畿地方を中心に出土する「近畿式銅鐸」の「飾耳」と呼ばれる銅鐸の縁につく飾りの部分です。銅鐸の発見は県内では7例目になりますが、発掘調査での発見は県内初となります。

このように破片とはいえ銅鐸が発掘調査で発見できたことは、岐阜県内の出土数の少なさが物語るように、意義深いものです。

銅鐸は弥生時代においては極めて希少なもので、荒尾南遺跡に居住していた人々は、それを持つことができた県内でも有数の大集団であったことが推測できます。



出土した銅鐸の破片(飾耳)
直径5cm原寸大

出土した破片から想定できる
銅鐸の全体図

弥生時代終わり頃に、濃尾平野における一つの拠点となるような大集落を形成していたとも考えられます。今後の発掘調査や整理作業でその様子が分かってくるのではないかと期待しています。

私たちの生活と水

子どもが小川でダムを造って遊んでいます。さて、うまくできるでしょうか。最初は水の勢いを抑えようとして石を並べましたが、石の間から水が抜けてしまいました。そこで、まわりの草を抜いて石の間に詰めましたが、水の勢いが強くて、草が浮いてしまいました。あれこれと考えたすえに、木の枝を持ってきて、短い枝を川底に差し込み、長い枝を石の手前に据え、そこに草を絡めて、何とかダムが完成しました。



このような水遊びは誰でも経験があると思いますが、木や草を用いて川を治める工事は、すでに弥生時代から行われていました。

私たちは、水がなくては生きてはいけません。作物を育てるためにも水は必要不可欠です。現在では、大規模なダムを設けて水を管理していますが、昔は一度大雨が降ると川がはんげし、付近の田畑や集落が水に浸かり大変な苦勞をしました。そこで、人々は川を制御するために護岸施設や堤防を設け、水流を固定しました。また、川に堰せきを設けて、田畑に水を取り込みました。今回の考古学教室は、そのような川の施設に関する話です。

柿田遺跡で見つかった川に関する遺構

岐阜県可児市から御嵩町にかけて、柿田遺跡という縄文時代から江戸時代まで続く遺跡が広がっています。この遺跡は、東海環状自動車道建設工事に先立ち、当センターが発掘調査を実施しました。その結果、主に古墳時代から江戸時代までの護岸施設や堤防、堰など、川を制御する様々な遺構を発見しました。



古墳時代後期の堤防

古墳時代前期の堤防は、杭と粘土を用いて堤防の基礎を造り、堤防の表面にはアシやヨシなどの草が丁寧に並べてありました。表面に草を敷くのは、堤防の中

の水分が多くなると堤防が崩れやすくなるため、浸水を防止するための工夫です。

古墳時代後期になると、堤防の表面だけでなく、堤防の中にも草や木の枝を敷いた層がみられました。その上には薄い粘土の層があり、草の層と粘土の層が交互に何層も堆積していました。粘土の層が薄いのは、足で踏んだり、棒でついたりして土を固めているためです。土を固めると、土の粒子間



室町時代の堤防

の空気や余分な水が外に出て隙間が小さくなり、粒子の結合が強くなります。また、草や木の枝を敷くのは、土が滑ることに対する抵抗力を強めるためです。このような、盛土を補強する工法を「敷土工法」と呼んでおり、古墳時代に朝鮮半島から伝わった治水技術とされています。

鎌倉時代から室町時代になると、これまでの技術に加えて「石」を用いるようになりました。柿田遺跡では、幅約10mの室町時代の川に、長さ80m以上の堤防が築かれていました。この堤防の基礎は、古墳時代のものと同様に杭や草、木の枝で構成され、その上に拳大の石が敷き詰めてありました。杭の本数は約2,800本ととても多く、1㎡当たり約20本もの杭が打ち込まれていたこととなります。杭は土の流失を防ぐための工夫、石は堤防の重みに耐えうる丈夫な基礎を造り出すための工夫といえます。

過去と現在

現在は、石やコンクリートで護岸された川が目立ちます。子どもたちはその風景に慣れていますが、小さなダムを造る時にも、まず石を持ってきます。しかし、柿田遺跡では、石を多用して水を治める技法は鎌倉時代になって初めて本格的に導入されました。人々は、それまで木と土、そして草を利用して川を治め、生活の糧となる水を得ていました。鎌倉時代になっても、それまで伝えられてきた技術を捨てることなく、それらと「石」という新しい素材を組み合わせて堤防を築くことに成功しました。それが、現在まで継承されているのです。

このように、現在の私たちの生活の安全性は、過去の人々の様々な工夫や苦勞を経て伝えられてきた技術の下に成り立っているのです。

現地説明会の報告

■ 有坂薬師堂遺跡(郡上市八幡町有坂)現地説明会 6月30日(土)

5月～7月の調査の結果、縄文時代中期から後期と考えられる石罫跡、縄文時代後期から晩期の配石遺構、その他にも大きな柱穴跡など多くの遺構が見つかりました。このことから約4,000年から2,500年前、当時の人々がこの場所で生活していたこと、祭祀や儀式的場であったことが分かりました。

現地説明会当日は、天候にも恵まれ105名の見学者がありました。説明会場では、主な遺構についての展示パネルなどを見ながら解説を聞いたり、熱心に質問したりする見学者の姿が見られました。また、遺物展示会場では、配石遺構から出土した石罫や、縄文時代中期から後期の土器や石器を見ていただきました。



全体説明の様子



出土遺物展示会場の様子

■ ウバガ平遺跡、与島B地点遺跡(高山市上切町)現地説明会 9月29日(土)

ウバガ平遺跡では、古墳時代終末期の古墳4基を発見しました。4基とも墳丘は残っていませんでしたが、周溝を確認しその形から円墳と分かりました。周溝から7世紀後半の須恵器が出土しています。また、縄文時代の住居跡3軒、弥生時代の住居跡3軒、時代不明の住居跡1軒を確認しました。弥生時代の住居跡床面からは、飛騨独自の弥生土器である横羽状文壺が出土しました。

与島B地点遺跡では、北調査区から自然流路2条を発見しました。これらは、調査区の西寄りと並行するように北から南へ流れており、西側の流路上層からは、古代の須恵器が出土しました。また、この流路の下層からは、古墳時代の土師器が出土しました。

説明会には、172名の参加があり、古墳の石室や住居跡、自然流路から出土した遺物などを熱心に見学していただくことができました。



全体説明の様子



遺跡見学の様子

発掘調査報告会

■ 平成19年度岐阜県発掘調査報告会 7月21日(土)

毎年夏頃に、埋蔵文化財に対する理解を深める目的で前年度に実施された県内の発掘調査の報告会を行っています。今年度は7月21日(土)に多治見市文化会館で開催されました。参加者は94名、会場はほぼ満席状態で盛況のうちに幕を閉じました。以下の事例発表が行われました。

事例発表Ⅰ(関市小洞遺跡ほか) 事例発表Ⅱ(関市大杉遺跡)
事例発表Ⅲ(池田町榎山古墳群) 事例発表Ⅳ(象鼻山古墳群)
事例発表Ⅴ(高山市野内遺跡C地区)

事例発表の各遺跡で出土した遺物も展示し、参加者の方々にも興味深く見学していただくことができました。



発掘調査報告会会場内の遺物展示風景



あとがき

平成3年7月の「きずな」創刊号には、この広報誌が「センターと皆さんをつなぐ絆、過去と未来をつなぐ絆、東西文化をつなぐ絆、そして地域のひととをつなぐ絆」になることを願って命名されたこと記されています。それ以来、「きずな」の発行は17年、今回で第50号を数えることになりました。

平成3年4月に発足した「財団法人岐阜県文化財保護センター」は、平成15年度には「財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター」に改組され、この間、事務所も穂積町(現瑞穂市)牛牧から岐阜市司町の岐阜総合庁舎へ、さらには岐阜市三田川の旧警察学校跡地へと移転しました。また、平成8年1月には、飛騨出張所の庁舎も完成しました。

発足当初13名だった職員は、最大の平成10・11年度には58名に及び、報告書の発行は平成18年度には107集に達しました。過去17年間で発掘調査した遺跡数は約160遺跡、その面積は合計約57万㎡、収蔵する遺物はコンテナ約23,000箱分にも及んでいます。

これまで「きずな」は発掘調査の成果をお伝えしたり、埋蔵文化財の調査・保護・活用の重要性を訴えたりしてきました。「きずな」を通して考古学の魅力を感じ、先人の残した出土品等に感動した方も多いのではないのでしょうか。おりしも、県内の各学校では「ふるさと教育」が展開されています。子どもたちが、ふるさと岐阜県に誇りと愛着がもてるように、また広く県民の皆様が埋蔵文化財の保護に関心を持っていただけるように、今後も「きずな」を有効にご活用いただければ幸いです。

